

眉をあくれば

秋田県立雄物川高等学校
校長室だより 第7号
平成29年12月19日(火)
執筆 信田 正之

昨日に勝る今日の道

雪が降りしきる12月9日の夜、今年で12回目となる本校吹奏楽部の定期演奏会が横手市民会館で行われました。悪天候にもかかわらず、会場には保護者や地域の方々、卒業生、そして本校の生徒が大勢詰めかけ、駐車場には車が溢れ、900席余りの座席が一杯になるほどの盛況ぶりでした。吹奏楽部は、3年生を入れても部員がわずか22人しかいません。しかも、期末考査明けで練習時間も限られていたはずですが、にもかかわらず、この小編成のバンドは、大編成に勝るとも劣らない迫力あるステージを演出してくれました。

本校吹奏楽部の演奏が素晴らしいことは誰もが知る事実です。一つ一つの音やハーモニーは確かに豊かで美しい。でもこの日は、それ以上に人を惹き付ける何かがあるように思えました。そのことに気づいたのは、「ディオニソスの祭」の演奏です。全県コンクールでも演奏したこの曲には、東北大会出場を逃したという苦い思い出があります。ショックから立ち直るのも大変だったことでしょう。でも部員たちは悔しさを気迫に変え、実に堂々とした演奏を私たちに披露してくれました。続く「主よ、人の望みの喜びよ」では、冒頭で「他界した部員への追悼曲」という紹介がありました。身近な友人の死ほど悲しい出来事はありません。ましてそれを音楽で表現するのは大変だったはずですが、演奏された緩やかで美しい旋律には、苦悩を乗り越え逞しく生きようとする部員たちの静かなる決意が表れていました。

今年の吹奏楽部には、活動を脅かすいくつもの壁が立ちふさがりました。しかし部員たちはその壁を一つ一つ乗り越え、この日を迎えました。その行為から得た勇気と自信こそが、私たちに与えてくれた感動そのものだったのです。そう考えたとき、私は演奏会のサブテーマ「昨日に勝る今日の道」に大きな意味を感じました。紹介するまでもなく、この言葉は本校校歌の一節ですが、部員たちは演奏を通して、「理想を掲げ、信念を持って前に進めば、道は拓ける」ということを身を挺して示してくれたのだと思っています。

さて、本校は2学期だけでも男子バレーボール部の24年連続となる春高バレー出場や家庭クラブの東北大会出場、美術部の県展10作品入賞など、多くの華々しい実績を収めました。しかし、それはまだ序章に過ぎません。どんなに素晴らしい成果にも必ず課題はあります。バレーボール部は全国大会で上位に進出することが大きな壁ですし、家庭クラブは全国大会への夢が残されたままです。美術部も、今ある才能はまだまだ開花できる。ぜひ皆さんには、現状に甘んじることなく、課題を克服して次のステップに進んでほしいと思います。それこそが、校歌で「昨日に勝る今日の道」と高らかに歌う皆さんに与えられた大きな使命ではないでしょうか。2017年も残すところあとわずか。来年はさらに皆さんが成長し、「去年に勝る今年の道」になるよう心から願っています。